

道博協ニュース

第32号

発行所 北海道博物館協会
事務局 札幌市厚別区厚別町小野幌
北海道開拓記念館内
電話 011-898-0456
FAX 011-898-2657

第二十九回北海道博物館大会終える

平成二年度の第二十九回博物館大会は、去る七月十一・十二日の両日、百五十名からの参加者のもとに江差町において開催された。

第一日目は、午前九時三十分から開会式、ついで平成二年度の総会に移り、平成元年度事業報告、同会計収支決算報告、監査報告がなされ承認された。さらに、平成二年度事業計画案および収支予算案についても原案どおり可決された。また、平成三年度の大開催地は第三十回の記念大会とも重なることから、道央圏の苫小牧市で開催されることとなった。この後、浦河町郷土博物館協議会の黒崎康雄氏より後記のような提案がなされ、満場一致で採択された。十一時過ぎからは「日本における博物館の現状と課題」のテーマで、この一年間の博物館界の動向を中心に、日本博物館協会専務理事 毛利正夫氏よりご報告をいただいた。午前の部の最後は、大ホール

の舞台を利用しての記念撮影であった。午後は「江差地方の歴史と文化」と題して、郷土史家 宮下正司氏より地元研究者ならではの興味深いご講演を拝聴、ついで二時半からは大会のハイライトでもあるシンポジウムが、乙部町教育委員会 森廣樹氏の司会によって進められた。提言者は上ノ国町教育委員会 齊藤邦典氏、江差町 同 藤島一巳氏、熊石町 同 松田紀嗣氏で、それぞれの地域の歴史と文化を背景にして建設、あるいは構想中の博物館についてその経過と現状、さらに課題や展望なども含めて報告された。これを基に多くの参加者からも実践活動をおしる意見が述べられるなど、実りあるものであった。このあと、日程上の都合から、翌二日に予定されていた閉会式が繰上げて行なわれ、最後に学芸職員部会の総会が関係者により行なわれた。懇親会は午後六時より会場から少し離

れたホテルニューえさしにおいて開催されたが、地元江差町教育委員会のご配慮による正調江差追分、餅つき囃子の催しなどもあって盛会のうちに初日の日程は終えた。

二日目は、午前九時過ぎに文化会館前を二台のバスに分乗して出発、はじめに上ノ国町勝山館跡、笹浪家を見学、再び江差町内に戻って追分会館、中村家、田関川家別荘を訪ね庭園で休息・昼食となった。このあと、開陽丸青少年センターの見学後自由解散となり、二日間にわたる全日程を無事終了した。

最後に、地元江差町教育委員会をはじめ関係者の皆様には、衷心よりお礼を申し上げます。 (事務局)

要 望 書

今日、国際化時代、高齢化社会、余暇社会の到来などをはじめとして、我々をめぐる社会情勢の進展はまことにめまぐるしいものがあります。社会教育の面におきましても「生涯教育」に関しましてはいよいよ実践段階を迎へ、博物館施設の果たす役割はきわめて大きいものがあります。北海道博物館協会は、過去三十年間にわたり道民のニーズに応じながら北海道の学術教育、文化の推進に大きく寄与して参りました。今後道民の博物館施設に寄せられる期待は、一層大きなものが予想されます。

しかしながら、北海道の博物館行政に関する体制はきわめて弱体であると言わざるを得ません。北海道において当博物館協会が今後も果たさねばならない役割は、きわめて大きなものがあります。私共は、これまでにも自助努力を続けて参りましたが、北海道教育委員会におかれましても、今日的課題を十分に認識され、当協会の活動に対し尚一層の御助力をいただけますようこの大会の名において強く要望するものであります。

平成二年七月十一日
第二十九回北海道大会
参加者一同

第二十九回北海道博物館大会に参加して

第二十九回北海道博物館大会は、歴史と観光とを結びつけて力をいれている江差町において開催されました。大会テーマは「地域文化の継承と博物館」でした。

私は、昭和五十四年から学芸員の職に就いていますが、今回の出席で通算六回目になります。平均すると丁度半分出席している事になります。江差の春は江戸にもないと言われるこの地は、私にとって行ったことがなく、そして以前からは非とも行ってみたい魅力をもった町でした。こうした歴史的な素材を、町の発展に結びつけている現在の姿を見てみたい、というのが江差に行く前の素朴な気持ちでした。

大会での、地元江差町の郷土史家宮下正司氏の講演「江差町の歴史と文化」は、さすがに永年この地に住みその歴史を研究し、「江差町史」を編纂されているだけあって、含蓄に富む講演でした。その

内容には、松前が城下町だとすれば江差は商人の街であり、漁業の集荷地であって、弁財船を操る土着の回船問屋の活躍が目覚ましい場所であり、この回船問屋により江差の経済・文化が形成されたと力説されました。また、文化は特に祭りの運営の方法など、今でもその伝統を残していることを説明されました。この有名な江差の姥大神宮祭の山車と、根室市の指定文化財の恵比寿像とは、何らかの関係があるかもしれないとされているので、私にとつては、特に興味深いお話でした。

この大会のメインは、シンポジウム「地域文化の継承と博物館づくり」でした。このシンポジウムでは江差町の藤島氏・上ノ国町の齊藤氏・熊石町の松田氏の三人がそれぞれ町の現状を踏まえた提言を行いました。特に藤島氏と齊藤氏の報告した上ノ国町と江差町は、二日目の日程で見学し実際に目にしたので、現状がどのようになっているかを、よく理解することができました。提言の後で質疑がありました。ここで話題となったのが、観光と博物館施設との関わりでした。この点については私も考えさせられました。観光であつても、主体者の考え次第で教育的な作用を発揮できるであろうという感想を持ちました。

二日目は上ノ国勝山館・笹浪家・追分会館・中村家・関川家・開陽丸青少年センター等を見学しましたが、江差町では、博物館・資料館・文化財などの積極的活用だけでなく、開陽丸の復元など新たに町のシンボリックな施設を整備している姿は、見習うところが多々あると感じました。上ノ国町の勝山館の調査と整備は、もう既に一〇年以上続けられていますが、こうした長い年月にわたる事業は、担当者として理事者との両者の熱意があつてこそ、可能だと思つてくきました。

以上のように、私にとつては、期待していた成果を得ることができた大会でしたが、毎年、北海道のどこかで開催される、この北海道博物館大会の意義は何だろうかという点について、少し考えてみようと思います。この大会の参加者の一人は、この大会を「七夕」と位置づけました。その意味は、一年に一回、牽牛星と織姫星が会うように、北海道の博物館関係者が一堂に会すことに例えたのでした。実際は、全ての関係者が、毎年出席するというのは、まず無理ですが、少なくとも北海道の博物館関係者が一堂に会す機会はこの時しかないのです。大会の日程の中で、関係者が意見を交換するのは、シンポジウムの時です。この質疑・討論は、いつも司会者の采配によって、出席者から意見を求めるということが多く、積極的な発言や白熱した論議という場面は少ないようです。今回も、この地域の歴史で忘れてはならない重要な点は、和人の進出によるアイヌ民族の歴史である、と

いう意見が提示された事などを除けば、やや寂しいシンポジウムであつた感じがしました。しかし、時間等の関係でしかたがないような気がしますが、参加者は、それぞれの地域で第一線で活躍している人がほとんどです。皆、意見を

持っている人ばかりです。これらの方が自由に、そして時間

をあまり気にせず話合

うのは、やはり懇親会から続く夜の会合なのです。一年に

一度の二日間では、最善のよう

な気がします。日常の博物館活動で、一人の学芸員の能力を越える知識が要求される

ことが少なくありません。そんな時、他館の学芸員に協力を求めることが多々あります。

この大会は、他分野の専門家を知る事と情報交換の場所にもなっています。

学芸員部会があります。私のような現場の立場では、この部会の充実が、さらにこの大会を成功に導く鍵を握っていると感じています。

根室市博物館開設準備室

学芸員 川上 淳

北海道博物館略史 (1)

北海道博物館協会は、昭和三十六年六月に設立され、来年は三十周年を迎えようとしている。

北海道最初の博物館施設は、明治十年(一八七七)に開拓使が開設した札幌假博物館で、その後、函館假博物館、札幌博物館、函館第二博物館、水産陳列場、北海道物産陳列場などが次々と開設され、日本の地方博物館として先駆的役割を果たし、近代日本博物館史の中で、特色ある動向を示したのである。

その後、大正期から昭和初期の停滞期を経て、昭和三十一年代から活気を見せるに至るが、道博協の設立は、そのような気運を反映したものであった。しかし、北海道の博物館施設が急速に増加し始めるのは昭和五十年代からで、現在は三〇〇をはるかにこえるに至った。

今回から一〇回の予定で、北海道の博物館のあゆみをふ

りかえつてみることにしたい。博物館の今後のあり方を考える際に、何か示唆するところがあれば幸いである。

一、開拓政策と博物館

明治前期

(1) ケプロンの提言

明治四年(一八七一)、開拓使が北海道開拓事業を推進するために、アメリカ合衆国の農務長官ホーレス・ケプロンを御雇教師頭取兼開拓使顧問として招いたことは有名であるが、彼は来日の翌月、即ち明治四年八月二十五日(陽曆十月九日)に開拓使に「文房」と「博物院」の設立を建言した。

彼は、「教導ノ道ヲ開クニハ」学校とともに図書館・博物館が不可欠であると考え、これらの教育機関の設立を「緊急事件」として留意すべきことを提言したのである。彼は、この建言書の中では、主

として資料収集の方法について述べ、日本産の動・植・鉱物を採集し、外国産のそれらと交換すべきことを具体的に提案している。彼が開拓計画の基本構想とも言うべき第一次報文を提出するのは同年十一月二十二日(旧曆)のこと

で、それ以前に博物館設立意見を述べていることは、彼が北海道開拓政策の上から博物館を重視していたことを示しており、日本博物館史の上からも先駆的な意見の一つとして注目すべきであろう。

この博物院は、その後明治十年開設の假博物館の運営、新博物館の開設準備を担当しているが、万国博覧会(明治九年フイラデルフィア、十一年パリ、十二年シドニーなど)や内国勸業博覧会(明治十年

(2) 勸業政策と博物館

次に、開拓使及びその後の行政機構の中で、博物館、博覧会等に関する業務がどう扱われていたかを見ておきたい。

開拓使札幌本庁では、明治五年九月設置の生産掛が六年六月に物産局と改称され、その中に博物課が設置された。同課の分掌事項は、明治八年制定の「分局章程」によると、「物品ヲ採蒐シ博覽ニ供スルヲ掌ル」と記され、物品につ

いては「其種類ヲ分子、名称

ヲ明ニシ、出産ノ地、発見ノ時ヲ記シ、之ヲ産物明細録ニ編ム」「常ニ之ヲ展列シテ博覽ニ供シ或ハ博覧会ニ送り之ヲ展覧雜記ニ編ム」「毎歳之ヲ統計シテ産物博覧表ヲ作ル」と規定されている。これらの事項は、まさに博物館の業務そのものである。

この博物院は、その後明治十年開設の假博物館の運営、新博物館の開設準備を担当しているが、万国博覧会(明治九年フイラデルフィア、十一年パリ、十二年シドニーなど)や内国勸業博覧会(明治十年

第一回、農業假博覧会(明治十一年・十三年札幌、同十二年・十四年函館)等に関する業務は、民事局勸業課が担当している。

明治十五年に開拓使が廃止されると、札幌の博物館は農業省省博物局の所管となり、さらに同省北海道事業管理局札幌農業事務所を経て、明治十七年札幌農学校に移管された。

一方、函館県の場合は、勸業課の農務係が「公園、博物

場等ノ事務ヲ管掌」し、札幌

県では勸業課の博物係が「天産人工ノ古物保存及ヒ蒐集ノ事」と「博覧会及共進会ニ関スル事」を担当した。さらに、明治十九年に北海道庁が設置されると、第二部(明治二十四年内務部、三十年殖民部と改称)の農商課が博覧会、共進会、物産陳列場等に関する事務を担当している。

以上のように、明治前期の博物館施設は、行政組織の上から見ても勸業政策の一環として設置、運営されていたことを知ることができる。

(3) 東京の北海道物産縦観所と假博物館

ケプロンの博物館建設の意見が実現したのは、彼の帰国(明治八年五月)後の明治八年八月のことであった。この頃になると、開拓使による北海道開拓政策が著しく進展しつつあったが、それを一層発展させるには、北海道の自然環境や産物に関する情報を一般に広く普及する必要がある。また、万国博覧会へ出品

を



開拓使仮博物館

する北海道関係資料の収集事業を通じて、動植物標本、アイヌ民族資料、地域の特産物（製品）などに対する関心も高まりつつあった。

明治八年七月に東京、芝公園内の開拓使東京出張所構内にあった仮学校が札幌に移転することになったため、翌月その跡に北海道物産縦観所が設置された。その目的は「北海道ノ物産及開拓ノ参考ニ供スヘキ内外ノ物品ヲ展列シ衆庶ニ縦覧セシム」(「開拓使事業報告」)とされ、農業課に事務取調掛が置かれて、事務を担当した。

同所の陳列品には、まず物産課から引継いだ鉱物類があり、札幌本庁、函館・根室両支庁等の収集協力を得た結果、明治九年一月には約一四九〇点となった。その内訳は、動物二二八点、植物七二二点、

鉱物八二点、製品四五九点である。動物は、鳥獣の剥製や皮革、魚類の標本や加工品(乾物・薫製・魚肥など)、獣類や昆虫の液浸標本が多く、構内には檻を設けて熊などの野生動物を飼育していた。植物は、野生の樹木・草花、木材見本、盆栽、海藻のほか、果樹や農産物(野菜・穀物・麻など)である。鉱物は、ライマン等が採集した石炭を中心とする各種鉱石・岩石標本、彼等が作成した多数の地質図、道内各地の写真等である。製品は、主として開拓使官営工場の製品(器具・家具・生糸・絹織物・農産物加工品など)とアイヌ民族資料である。また、北海道の産物と開拓の

参考資料であった。

この北海道物産縦観所は、明治九年二月に開拓使東京仮

博物館と改称され、勸業課に仮博物館係が置かれて事務を担当した。仮博物館設立の趣旨については「北海道産物ノ義ハ、広ク衆人ノ見聞ニ触レサル者有之候ニ付、専ラ該道動植物ノ類其他有益物品ヲ蒐集シ、傍各国ノ物品ヲモ取交ヘ参考ノ為(中略)陳列シ(中略)内外人民ヘモ縦観差許ス」(「仮博物館設立ノ義上申」)と記されている。施設の目的は基本的には従来と変わっていないが、一般公開(縦観)を重視し、陳列場の拡張と陳列品の充実をはかることになったのである。

この仮博物館は、明治九年五月十日から一般に公開された。組織は「仮博物館管理」の元に、記録、会計、培養、列品の四係が置かれた。明治十年二月の職員数は十七名であるが、特徴的なことは、当時政府が殖産興業政策の一環として開催準備を進めていた第一回内国勸業博覧会の係員が四名兼務していたこと、写真師・画工・製造人(鳥獣剥製人)などの専門技術者や植

物栽培・動物飼育の担当者が配置されていたことである。開場日は、祭日・祝日および年末年始の休日を除く毎日、陳列替の場合は臨時に休場日を設けた。開場時間は季節により長短があり、入場料金は一人五厘で、四歳以下は無料とした。年間有料入場者は四万~四万五千人であった。

この仮博物館は、現在の一般の博物館と異なり、物品培養係や農夫を置いて、北海道および外国の果木・花草等を栽培し、牛・綿羊・ヒゲマ等の飼育も行ない、植物園や動物園の機能をも一部果たしていたのである。年間経費は約二五〇〇円であった。

であるが、その数量は不明である。収集された資料は場内に陳列されただけでなく、東京博物館(文部省管轄、明治十年教育博物館と改称)や国内各地で開催された博覧会等にもしばしば譲渡あるいは貸し出され、活用されている。

北海道の博物館の先駆的役割りを果たしたこの仮博物館は、明治十四年五月の開拓使東京出張所廃止に伴い閉場となり、列品は札幌、函館の仮博物館および札幌農学校に移管され、一部は東京上野公園内の教育博物館に付与されたのである。

「主な参考文献」
関秀志「明治初期~中期における北海道の博物館―札幌を中心として―」(「北海道開拓記念館研究年報」第四号、昭和五十年)、関秀志ほか「明治期における北海道の博物館(1)」(「北海道開拓記念館調査報告」第二九号、平成二年)

北海道開拓記念館開拓の村整備室長 関 秀志

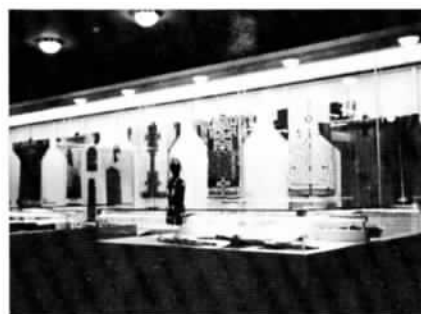
館 園 紹 介

○函館市北方民族資料

石川啄木資料館

平成元年十一月三日、函館市末広町に新たな函館の文化施設として「函館市北方民族資料・石川啄木資料館」が開館しました。明治期以来の伝統的な函館の街並みの一角にある資料館は、大正十五年から昭和六十二年まで営業してきた旧日本銀行函館支店の建物を活用して函館市が開館し、財団法人函館市文化・スポーツ振興財団にその管理・運営を委託する業務体制で運営いたしております。

資料館の名称が示しますとおり、資料館は北方民族資料と石川啄木資料という函館を代表する文化的コレクションを一堂に展示・公開し、その資料的価値と資料的意義を広く内外に周知していただくと共に函館文化コレクションを親しみながら観覧していただくというもので、資料館一階が北方民族資料館、二階が石川啄木資料館となっております。



「北方民族資料館」は、ジャンル別展示テーマ「くらしの中の手仕事」、「装いの美学」、「北の神々」をベースに世界的なアイヌ民族資料の逸品として知られる函館博物館旧蔵資料、馬場コレクション、児玉コレクション約二百四十件によって展示構成しております。

各コレクションの内容を紹介いたしますと、函館博物館旧蔵資料は、明治十二年の開拓使函館支庁仮博物館時代から函館博物館の歴史と歩んできた日本に現存する最古のアイヌ民族資料です。馬場コレクションは、函館出身の北方民族学者馬場脩氏が昭和初

期に樺太、千島、北海道で収集した資料で、その中の国の重要有形民俗文化財「アイヌと生活用具コレクション」が有名です。児玉コレクションは、元北海道大学名誉教授児玉作左衛門氏が第二次世界大戦前後、緊急を要したアイヌ民族学研究の中で収集した資料で、今日のアイヌ民族学研究の基礎をなす貴重な資料となっております。これら三つの

コレクションの有する資料的意義こそが資料館の最大の特徴となっております。また、観覧に際しては、展示ホールのシンボル・ディスプレイ「森の中のコロポックル」や山丹交易を物語る山丹服は、ひととき目を引いています。

「石川啄木資料館」は、漂泊の歌人と称される日本近代短歌史の画期的な変革者、石川啄木の二十七年という短い生涯をたどりながら、その社会的背景から生み出された優れた数多くの文学の業績を紹介しております。

展示内容は、啄木の生まれ故郷、浜民時代から終えんの

地東京時代にわたる各時代にそって展示構成され、啄木が残した詩集、歌集よりタイトルをとって「あこがれ」濱民・盛岡時代、「忘れがたき人々」北海道時代、「東海の小島の磯の…」函館時代、「我を愛する歌」東京時代、「悲しき玩具」東京時代という展示テーマの設定の中で、啄木ゆかりの小説原稿、歌稿、日記、書簡、初版本、写真パネル等約百二十点を展示しております。また、展示室のほか

に啄木情報コーナーを設け、啄木に関する最新の出版物をお知らせしております。



以上、函館の新しい顔として誕生しました「北方民族資

料・石川啄木資料館」を紹介してまいりましたが、函館はもとより日本を代表する文化コレクションの逸品として資料的意義をふまえ、今後さらに展示資料の充実とともに資料の調査・研究機関としても広く供される施設づくりを目指してゆきたいと思っております。

《北方民族資料

石川啄木資料館案内》

所在地 函館市末広町二十一番七号

電話番号 0138(2)4128

開館時間 九時～十九時(四月～十月)、九時～十七時(十一月～三月)

休館日 十二月三十一日～一月三日

入館料 一般三〇〇円、学生・生徒・児童一五〇円

(二〇名以上の団体は二割引)

交通案内 函館市電 末広町

電停下車徒歩一分

(函館市北方民族資料・

石川啄木資料館

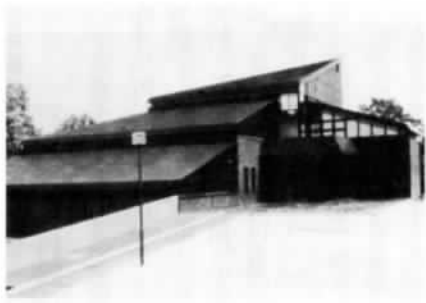
学芸員 長谷部一弘)

館 園 紹 介

○ 士別市立博物館 ○

士別市立博物館は、昭和五十六年、士別市開基八十周年を記念し、北国の厳しい自然のなかで未開の大地を伐り開いた先人の偉業を称え、より良い明日を創造する場として、士別ふどう公園の一角に建設されました。

三十四ヘクタールの面積を有するこの公園は、市街地を俯瞰するなだらかな丘陵地帯にあり、白樺、ナラなどの自然林の中に散策路、ランニングコース、ロッジなどが配置



され、四季折々に草花が咲き乱れ、多くの野鳥がさえずる

自然の楽園です。

博物館はこの公園の優れた自然環境と景観を背景にし、また、雄大に広がる丘陵の形象になじませるため、緩やかな勾配をなぞるように床にレベル差をもたせ、それぞれ床に対応して段状の屋根を繰り返す四角錐の独特の設計の建物です。

この近代的建築物の隣接地に昨年十一月、大正ロマン溢れるアンティークな概観の士別公会堂が美術品の展示、特別企画展示等に使用する展示館として復元されました。

これら、相反する新旧二つの館は、連絡通路で結ばれ一体管理されていますが、深い森を背景に鮮やかなコントラストを作り出しております。内部展示は(一)ふるさと

三十二年の屯田兵入植以来、今日までの士別の歴史を産業、生活、交通、教育資料等で解

説、さらに屯田兵の生活、冬

山造材、馬車鉄道をジオラマで再現し、先人の労苦を偲ぶコーナーです。

「天塩川流域の自然と文化」は、太古から天塩川の豊かな恵みを受けてきた人々の生活を考古資料、アイヌ資料で解説するとともに森の動植物の様々な生態をジオラマで紹介しております。このほか六百種におよぶ蝶標本をはじめ、樹木標本等が展示され、また、変化の激しい士別の四季の風景とそこにたくましく生きる市民の姿を常時ビデオで紹介しております。

「郷土の美術」では、七刀法を巧みに操り、昭和の左甚五郎と称された彫刻家阿部晃工、十三年にわたるフランス留学から帰国後故郷士別で創作活動を続けている国際的銅版画家小池暢子の作品を主に士別出身の美術家の作品を鑑賞していただいております。

「北方圏」は、私達のまことよく似た厳しい自然環境にある北方圏の人々のくらしを知り、明日の北国の生活と文

化を考えるコーナーです。これら常設展示のほか開館以来、蝶と甲虫、北の野鳥、昆虫と自然、北の動物、消えた農機具、北のくらし、などの特別展、テーマ展を各種の主題により年3〜4回継続的に開催しております。



教育普及活動としては、この地方の豊かな自然を活用し野鳥、野草、地質、高山植物観察などの自然観察会、縄文土器、昆虫標本作り、昔のレコード鑑賞会などの体験学習会を利用者の要望を取り入れ毎年定期的に開催しています。

また、天塩川流域の自然と文化が当館の調査研究活動の主テーマですが、これらの成果は毎年士別市立博物館報告で発表していますが、このほか一昨年度より「士別の野鳥観察」「士別の草花」と郷土学習シリーズを発刊しました。

ますます多様化、高度化する利用者のニーズに応え、これら博物館活動を実施していくため、昭和五十八年から特別学芸員制度を設け人文・自然科学それぞれの分野に専門知識を有する方を「特別学芸員」に委嘱し、協力していただいております。

《 士別市立博物館概要 》

所在地 士別市西士別町二五番地(ふどう公園)
電話番号 01652(2)3320
開館時間 九時三〇分〜十六時三〇分
休館日 月曜日、祝日、年末年始
入館料 大人一〇〇円、小学生五〇円(団体二〇名以上は二割引)

(士別市立博物館)

館長 朝日 保

◇館園動向◇

◀風連町歴史民俗資料館▶

同館は風連町開基九十年記念事業の一環として、本年四月四日に開館した。建物は鉄筋コンクリートの二階建てで、外観は米蔵をデザイン化している。「北限の農業―未開の大地と寒冷地農業への挑戦」をメイン・テーマに、①

会期 平成2年10月5日
会場 アークシテイホテル
(JR新札幌駅前)
〒004 札幌市厚別区厚別中央2条5丁目6-2
(TEL 011-890-2525)
テーマ 「野外博物館の運営と各館の野外付属施設の活用」

「南サハリンの野外調査」
「ウラジオストクの博物館」
交流会 18:00〜20:00
第二日目 10月6日
(於北海道開拓の村)
現地研修 9:30〜12:00
説明者 北海道開拓の村
参事 大石雅二
学芸員 遠藤昭浩
閉会式 12:00〜12:15
◇館園の主な行事案内◇
(10月から12月まで)

●北海道開拓記念館
10・2〜11・29体験学習「稲とわたしたちの生活―しめなわをつくる―脱穀・稲摺・精米」、11・3第38回特別展開覧講演会「中国東北部の少数民族」、11・11〜12・22第83回「松前の石碑」、11・17北海道文化シリーズ講座「北海道の食習―冬の保存食と行事食―」、11・24、25講座「資料と語ろう北海道の歴史」、12・2講習会「絵馬をつくる」、12・1稲とわたしたちの生活―しめなわをつくる―、12・8〜12・22クリスマス、12・22もちつき

●北海道開拓の村
10・14農作業体験―収穫―、10月毎週土・日・祝日伝統遊具づくり「ガリガリとんぼ」、11・1〜30特設展「帯広にみる明治・大正の建造物」、11・11伝統技術「わら細工―ぞうり―」、11・25伝統技術「わら細工―わらじ―」、11月毎週土・日・祝日伝統遊具づくり「とんだりはねたり」、12・9〜20第5回北海道開拓の村写真コンテスト、12・8、9伝

②古代人の生活、③未開の大地と寒冷地、④町のひろがり、⑤学校と子どもたち、⑥便利になった毎日、⑦いま風連町は、⑧豊かな風連の自然、の8つのコーナーで構成されている。そのほか、町民のボランティアによる常設展示などの解説を行なう協力員制度も来館者には好評のようである。

日程 第一日目 10月5日
(於アークシテイホテル)
受付 12:30〜13:00
開会式 13:00〜13:15
研究協議1 13:15〜14:15
「北海道開拓の村のあゆみ」
発表者 北海道開拓の村
理事長 松田幸男

●札幌市資料館
7・31〜11・25歌誌「新聲」
創刊60周年記念展
●札幌市青少年科学館
10・3〜4特別放映「星空へのいざない」、10・10科学映画会、10・12〜13初心者のための「星空セミナー」、11・3科学映画会、11・25実験教室(小5、6)、11・29婦人科学講座、12・2気象教室(小5以上)、12・24科学映画会

●北海道開拓の村
10・14農作業体験―収穫―、10月毎週土・日・祝日伝統遊具づくり「ガリガリとんぼ」、11・1〜30特設展「帯広にみる明治・大正の建造物」、11・11伝統技術「わら細工―ぞうり―」、11・25伝統技術「わら細工―わらじ―」、11月毎週土・日・祝日伝統遊具づくり「とんだりはねたり」、12・9〜20第5回北海道開拓の村写真コンテスト、12・8、9伝

●美唄市郷土史料館
11・18体験学習講座「年賀状づくり」、12・9体験学習講座「しめなわづくり」

◇道博協学芸職員研修会のお知らせ◇

次の要領で、平成二年度北海道博物館協会学芸職員研修会が開催されます。

研究協議3 15:30〜16:30
「博物館における野外付属施設の活用と問題」
発表者 士別市立博物館
館長 朝日保

●札幌芸術の森
9・29〜10・28ロダン展、11・3〜1・20所蔵品展(彫刻)、11・3〜1・20市民愛蔵秀作絵画展、11・18〜12・27芸術の森クリスマス展

●小樽市博物館
10・12見学会「近郊博物館を訪ねて」、10・19見学会「歴史探訪開拓の礎―旧樺戸監獄―」、12・16歴史講座「しめ縄づくり」

●美唄市郷土史料館
11・18体験学習講座「年賀状づくり」、12・9体験学習講座「しめなわづくり」

主催 北海道博物館協会
主管 北海道博物館協会
学芸職員部会

特別報告 16:30〜17:30

11・3〜1・20市民愛蔵秀作絵画展、11・18〜12・27芸術の森クリスマス展

●美唄市郷土史料館
11・18体験学習講座「年賀状づくり」、12・9体験学習講座「しめなわづくり」

●美唄市郷土史料館
11・18体験学習講座「年賀状づくり」、12・9体験学習講座「しめなわづくり」

- 旭川市青少年科学館
10・6～10・25「エクスポロ
ラトリア旭川展」
- 上富良野町郷土館
11・3特別展示「収蔵資料の
復元展示」
- 北海道立旭川美術館
9・29～11・4「近代彫刻の
流れ―西洋と日本―」、11・10
～12・22「木のニューウエ
ーブ」
- 国際染織美術館
11・30まで「アイヌの衣裳展」
- 士別市立博物館
10・7秋の自然探訪、10・28文
化講演会「マダカスカル島を
旅して―マダカスカルの蝶―」
- 北網走北見文化センター
11・14～11・25特別展「第16
回日仏現代美術展」
- 苫小牧市博物館
10月～12月体験教室「郷土学
習」、10・7見学会「さけ・ま
すふ化場見学」、12・16体験教
室「わら細工シリーズ」
- 室蘭市青少年科学館
10月上旬「科学技術振興作品
展胆振地方展」、10月上旬「盆
棧展」、11月「菊花展」、11・
23「室蘭市小中学校理科研究
発表会」
- 室蘭市民俗資料館
11月中旬体験学習「落葉焚き」、
12月上旬体験学習「石臼によ
るモチつき大会」
- 帯広百年記念館
10・7「食べてみようノ大昔
の食べ物」
- 幕別町ふるさと館
10・1「ふるさと館祭り」、
10・7「資料館を訪ねて」、
11・18「さけの卵拾い」、
12・2「バター作り」
- 厚岸町郷土館
11月特別展「昔の教科書展」
- 釧路市青少年科学館
10月「湿原で星を見る会」、
10～11月「小学校実験学習」、
12～2月「中学校実験学習」
- 釧路市立博物館
11・3～11・25「プラキスト
ン展」
- 標津町ホー川史跡自然公園
10月「ホー川祭り」
- ◇事務局日誌◇
6・7 第29回、北海道博物
館大会補助金交付決定
書(道教委社会教育課)
6・21 北海道文化財保護協
会より平成2年度「ア
イヌ文化財専門職員等
研修会」の後援依頼受
理。同日承諾書送付。
7・1 財団法人北海道生涯
教育学習協会より「平
成2年度社会教育関係
団体概況」原稿の依頼
に対し、活動概況等原
稿送付。
7・11、12 第29回北海道博
物館大会江差町で開催。
7・14 北海道教育委員会よ
り'90生涯学習フォーラ
ム・イン・ほっかいど
う」開催にかかわる協
賛名義使用依頼受理。
同日承諾書送付。
7・24 岩手県博物館等連絡
協議会より道博協規約、
大会資料、加盟館園名
簿等の資料提供依頼受
理。同日送付。
8・7 北海道教育委員会教
育長あて、教育関係大
会開催事業(第29回北
海道博物館大会)補助
金事業実績報告書を提
出。
8・8 道博協学芸員部会、
平成2年度学芸職員研
修会の開催要綱決定。
同日関係職員及び機関
に送付。
8・23 北海道教育委員会社
会教育課から他府県に
おける博物館大会の開
催状況についての調査
表作成の依頼があり、
同日、日博協各支部へ
調査表を送付。
8・24 第29回北海道博物館
大会において緊急動議
として提出され、可決
された北海道教育委員
会への援助要望書を、
近副会長、矢野理事、
長井理事(神原札幌市
青少年科学館普及課長
が代理出席)、矢島事務
局長が同道のうえ提出
を期待しております。
○平成元年度「館園現況調
査」を北海道開拓記念館と共
同で行なうことが、先の大会
で承認されました。現況調査
を行なうにあたってのアンケ
ート項目がまとまり、近々に
各館園にアンケート用紙を送
付します。ご協力のほどよろ
しくお願いいたします。